

日本山は権力を恐れませぬ

昭和四十八（一九七三）年四月三十日 ネパール国 加都 瀟都

南無妙法蓮華經

四月二十八日は日蓮宗門においては開宗日として法要を行います。日蓮大聖人はこの

日に清澄山をくだられて、ふたたびお山のぼられなかつたのでした。
日本山の涅槃樓開教も、起塔供養も、四月二十八日に停止いたしました。風毬に
急使を派遣して工事中止を申し送りしました。四月三十日、また三名風毬に往て跡仕末
を手伝わせ、全員一往加徳滿都へ引き揚げます。日本山の涅槃樓開教はこれによって頓
挫するものではありません。三障四魔の中に在て勇猛に前進します。『魔競わずんば
正法と知るべからず』。日本仏法の面目は魔障の中に判然とするでしょう。魔障を降伏
すること能わざる仏法は、広宣流布の仏法ではありません。後五百歳閻浮提内広宣流

布の仏法は天子魔群を降伏せしめるでしょう。日本山は権力を恐れませぬ。日本山は権
力に屈しませぬ。日本山は権力と妥協しませぬ。日本山は権力と闘争しませぬ。柔和忍
辱の鎧を着て、この經を説かんがための故に、この諸の難事を忍びます。

『我遣化四衆 比丘比丘尼 及清信士女 供養於法師 引導諸衆生 集此令聽法』
（我、化の四衆、比丘、比丘尼、及び清信士、女を遣して、法師を供養せしめ、諸の衆生を引導して、
之を集めて法を聴かしめん『法華維法師品第十』の金言を実現せしめます。この經文が虚言な

らざれば、日本山の涅槃樓開教は成就すること疑いありませぬ。
二月已来一百日、大仏事を如意満足に進捗することをいたしましたのも、ひとえに日
本仏教に覚醒せる涅槃樓の御信者が不眠不休の奔走活動の力であります。日本印度各国
において、いまだかつて見ることも能わざりし変化の人々とおぼえます。これらの人々が
憤激して拙子の許に詣ります。拙子が破顔微笑して歡喜しておるのを見て、理解するこ
とがでないようです。高祖日蓮大聖人が去る文永八年十一月一日に佐渡の塚原三昧堂
に移らせ給ひし時、まず「あら嬉しや」と仰せられました。「今日蓮は、末法に生れて、
妙法蓮華經の五字を弘めて、かかる責にあえり」。「あら嬉しや」の一言が今、我が口よ

探仙日誌

昭和四十八（一九七三）年六月十八日 ネパール国探仙

南無妙法蓮華經

去る六月十二日、一月余り住み慣れし婆根巴の仮の宿を發てポカラ駅に泊まる。約八百米、雪山の南側を下るポカラは遊覽地として繁榮する町として、生活資料も高価な

り自然にもれ出ることができません。側近のお弟子も次第と笑顔ができます。さすがに御信者たちは何としても笑顔はできません。何とかして、この状態を立て直さねばならぬと申されます。この状態はこの状態では有難いのであります。立て直さねばならぬものならば立て直しても、また有難い。

（『天鼓』昭和四十八（一九七三）年七月号二十九（三十頁より抜粋）

りと聞き、加徳滿都より生鮮野菜をたくさん買いこみて、ジープに積みこみが、ポカラの市場に出てみれば大道に玉蜀黍を焼いて売る者あり。一本邦貨三円という。三本をもつて一食にあつれば、一食十円に足らず。紅茶・野菜を加えて一日一人の食料五十円を出です。今度の旅行中の生計に不安なきを知る。しかるに普通の飯食は一人一食にして百円にも達す。一人一日の食費三百円にも及ばず。十人の大衆移動する時、その出費の莫大なるを恐れざるべからず。夜半、雷鳴豪雨の音を聞く。明日の旅行いかならんと案ぜらる。

六月十三日 雨やみて、朝日影射す。道路の破損もなく、午後二時すぎに探仙駅に入る。当地の仏教寺院に迎えられる。小供が集まりて法鼓を打つことを欣ぶ。

六月十五日 満月祭。アマリツタ難陀比丘來會せず。

六月十六日 アマリツタ難陀比丘來訪して嵐毘尼の始末を聞く。比丘曰く「一九四四年に我ら国内すべて二十余名の仏教僧を邪宗教者として監獄に幽閉すること四カ月。その後、国外に追放せられて印度に逃れ、やがて楞伽に渡り仏教徒連盟を作り、ネパール政府に交渉して帰国することを得。スワヤンブの道場を建立したり」という。印度教国